

埼玉県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

僕たちと税の存在

深谷市立上柴中学校 一年 柳澤 温

僕たち中学生にとって「税金」といわれた場合、思いつくのはついこの間までレシートに印字されていた「消費税」程度しかない。

テレビや新聞でよく「税制改革」とか「税の引き上げ」などとあるが、実際にどういふかたちの税が存在するのか、消費税以外納める立場にない僕たちにとっては別世界といってもよい。

今回、この税の作文を書くにあたって僕たちにも理解することが比較的容易なものはないかと資料をずいぶん探した。これから大人になって社会を担っていく僕たちに、社会の仕組みを説明してくれる本はきっとたくさんあるのではないかと思ったからだ。

ところが、どうしたことが無いのである。僕たちが将来税金を納めたり、社会に参加することは当たり前なのに、である。僕たちが大人になったら何も言わなくても税金を納めると善意に思ってくれているのか、または言っても税金を納めない人は少なからず出てしまうからあきらめているのか。それとも、子供達に教えてもきっとわからないだろうと初めから説明するつもりはないのだろうか。そうだとしたら、とても悲しい。同時に、僕たちをずいぶん見くびっているなと思う。

なぜ税金は存在するのか。なぜ税金を納めなければならないのか。社会科でも道德の授業でもよい。実際に徴収する側と納める側に分かれてゲーム感覚で体験する方法はどうだろう。僕たちに学ぶ機会を与えて欲しい。

そんな時に「税のしくみ」という中学生にも比較的理解のできそうな本を見つけた。

その本によると、税とは、企業が商売として行うには成り立たない、または、商売にはならないが、社会にとっては必要不可欠な商品やサービスを、政府が国民に提供する際に発生する費用をまかなうために使われるものだという。例をあげれば、身近なところで学校はもちろん、公共施設や道路、橋、公園、下水道の整備や管理、警察、消防、福祉など。もっと大きなところでは、国際貢献や環境保全、外交、防衛などがそれにあたるという。

なるほど、事件が発生したり、火事や急病人が出ても料金を払わないと出勤してくれない世の中など、想像すらしたくないことだ。

「ただ」であたりまえと勘違いしていることの中にも、税でまかなわれていることはたくさんある。そこに関わる人や物がある限り費用は発生するというのに、もっと敏感にならなくてはいけない。納めた税金分だけの恩恵にあずかっていないとか、自分の損得だけで判断することは避けなければならない。

誰にとっても公平な納め方、これはとても難しいことだが、ぜひ学生のうちに税金の仕組みと、誰もが納得できる税金の納め方について学び、社会人になったときに、積極的に社会参加できる人になりたいと思う。